

京都大学	博士（文学）	氏名	谷塚 巖
論文題目	キルケゴールのレトリック—キリスト教批判の実験的試み—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>序論</p> <p>キルケゴール研究は、キルケゴールの諸著作がドイツ語に翻訳されたころに本格化した。特にシュレンプらによるイエーナ版全集の刊行が進められた1920年代は、キルケゴール・ルネッサンスと呼ばれる研究状況が到来し、神学の分野では、弁証法神学という新しい神学の潮流が形づくられた。また1950年代には、実存主義の中心にキルケゴールの思想が位置づけられるようになり、哲学の分野でも重要な位置を占めるようになった。1960年代後半から1970年代にかけての、構造主義や言語批判を中心とするいわゆるポスト・モダンへと向かう思想状況のもとでは、「言語」に焦点を合わせた新しいキルケゴールの思想理解が試みられるようになった。1990年代以降は、デンマーク・キルケゴール研究センターの主導によって、文献学にもとづく校訂版キルケゴール全集（<i>Søren Kierkegaards Skrifter</i>, 1997-2013）の刊行が進められ、それと並行する形で歴史的研究が本格化し、キルケゴールの同時代を理解するためのさまざまな研究成果が生み出された。現在のキルケゴール研究では、ポスト・モダン以降の思想状況や近年の歴史的研究の成果を踏まえつつ、さらにデンマーク語原典としての校訂版全集にもとづいて、キルケゴールの思想をその根源から見直すことが求められている。</p> <p>第I部 キルケゴールとレトリック</p> <p>キルケゴールの著述活動において目指されていたのは、読者——19世紀デンマークの読者層——に対して「キリスト者である」とはどういうことなのかを問いたただすことであつた。それは、読者自身の「キリスト者」としての「自己認識」を揺さぶり、問いにかけることにほかならなつた。先行研究では、著述活動を介したこうしたキルケゴールの働きかけを「ソクラテス的対話」として理解することが試みられてきた（H・ディームやM・C・テイラー、稲村秀一らの研究）。第I部では、ポスト・モダン以降の研究状況を踏まえて（L・マッキーの研究）、キルケゴールの言語活動による読者へのこうした働きかけを、レトリックとして理解し直すことが試みられる。レトリックは、説得の技術や詩的表現の技術に関する学科として、アリストテレス以来の伝統を有するが、20世紀に入り、レトリックに「発見的認識」を形づくる新たな機能があることが見いだされ、注目し直されてきている。本論の第I部を構成する第2章から第4章では、キルケゴールの著述活動や仮名、伝達が、そうしたレトリックをめぐる現代の議</p>			

論の中で十分に理解されることが示される。

第2章では、キルケゴールの前期著述活動とその思想的文脈について論じられる。キルケゴールは、みずからを「宗教的著述家」として規定する。キルケゴールの著述の意図や形式には、レッシングからの強い影響が見られる。レッシングは、キリスト教に対して両義的な立場を取っていたが、キルケゴールはその立場を継承しつつ、仮名と実名との使い分けによる著述活動という独自の仕方では具体化したのである。すなわちキルケゴールは、その著述活動において、「キリスト者になる」という課題を一貫して追求したのであるが、それはレッシングの立場を、著述の二重性という仕方では具体化することによってであった。キルケゴールは、レッシングの立場を受け継ぎつつ、それを独自の仕方では読者に関わる問題として提示し直したのである。

第3章では、キルケゴールの仮名性の問題について論じられる。前章で明らかになったように、キルケゴールの仮名と実名は、キリスト教に対する否定と肯定という二つの相反する立場をそれぞれ代表している。その否定的立場が、キルケゴールにおける仮名性の問題として捉えられる。キルケゴールの課題は、「キリスト者になる」ことを伝達すること、すなわち「実存の伝達」にある。キルケゴールはこの課題を遂行するために、伝達者は「現実性」ではなく「可能性」の形式を用いなければならないと考える。つまり仮名とは、この伝達形式を実現させるために用いられた文学上の虚構なのである。このようにして仮名は、詩的な創作活動を担うものとなる。そして仮名によって、すなわち「可能性」という形式によって、「内面的現実性」の伝達が試みられるのである。こうして、受け手である読者がその伝達をいかにして受容するかが問われることになるのである。

第4章では、キルケゴールがコミュニケーションに関わる問題をどのように考えていたのかについて論じられる。キルケゴールが問題にしたのは、同時代において、「倫理的伝達」がそれにふさわしくない形式で行われているということである（「知識」の伝達）。キルケゴールにとって「倫理的伝達」のもとで問われるべきは、「文芸」の伝達であり、それは「現実化」、あるいは「受容者」の「能動的行為」として実現されなければならない。キルケゴールは、この伝達は「間接的」にしかなされえないと考える。こうして「知識」の伝達との区別が試みられるのである。一方で、伝達されるべきは「キリスト者になる」こと、厳密には「神の前に一人で立つ」ことである。ここには「宗教的なもの」という契機が入り込んでいる。キルケゴールは、この契機は外部から与えられなければならないと考える。これは、「知識」の伝達によって、すなわち「直接的伝達」によってなされる。こうして、「間接的－直接的伝達」、「倫理的－宗教的伝達」という概念が提示されることになるのである。キルケゴールが、同時代において最もふさわしい形式として提示しようとしたキリスト教的伝達とは、この二重化された伝達のことなのである。

第II部 キルケゴールの倫理思想再考

第I部で論じられたのは、キルケゴールの思想の形式的側面であり、そこに現代において新たに注目されてきているレトリックの機能を見いだすことができるということである。キルケゴールは、仮名性という文学上の虚構を介して、読者自身の「自己認識」を揺さぶろうとするわけであるが、レトリックの役割はまさにこのような「発見的認識」を形づくることにある。本論の第II部を構成する第5章から第7章では、読者において「自己認識」が問いただされるということが、具体的にどういうことなのか論じられ、それが「倫理的なもの」の内容をなしていることが明らかにされる。

第5章では、キルケゴールの「あれかーこれか」について論じられる。「あれかーこれか」は、同時代において論争されていた排中律の問題をめぐるミュンスターが用いていた表現である。それがキルケゴールによって独自の仕方を受け取り直されたのである。キルケゴールは、その表現を、どちらか一方を選択するというのではなく、むしろ、どちらも選びえた「あれかーこれか」の状況そのものを指し示すために用いる。「あれかーこれか」と呼びかけられた読者は、過去における未決定の状態、言い換えれば、過去において選択された事柄がまだ未来的なものであった、「可能性」の時点にまで連れ戻されることになる。そのようにして、行為に関する決定論がしりぞけられるのである。「あれかーこれか」とは、現実にならなかった「可能性」を読者に気づかせるためのレトリックにほかならない。

第6章では、「自己自身に責めを帰す」という問題がキルケゴールの自由論との関連で論じられる。前章で、「あれかーこれか」とは過去になされたある選択の地点にまで読者を連れ戻すための効果的な表現であることが明らかにされた。読者は、自己自身に向き直り、「あれかーこれか」であったこと、つまり「自由であった」ことにまず気づかなければならない。なぜなら、読者はそのようにしてようやく選択の「責め」を「自己」に問うことができるようになるからである。キルケゴールは、こうした「責め」と「自由」に関する問題を、アリストテレスやデカルト、ライプニッツの自由論を受け取り直す形で展開している。そして、選択された事柄の「責め」を自己のものとして負うことこそが「真の積極的な自由」であると論じる。重要なのは、そのような第二の選択において、「自己」があらわになると考えられている点である。すなわち、読者は「あれかーこれか」と呼びかけられることによって、もう一つの選択の「可能性」があったことに気づかされる。読者はその気づきにおいて、「責め」を自己自身に措定するのか否かという、第二の「あれかーこれか」に直面させられることになるのである。

第7章では、「責めを自己自身に帰す」ということが「悔い」として理解されることが論じられる。キルケゴールは、「自己自身に責めを帰すこと」は「自己自身を選択すること」であり、そしてそのことが「悔い」にほかならないと考える。注目すべきは、このことが「現に生起すること」(Tilblivelse)というキルケゴールのいわゆる

「生成」に関する理論に根拠づけられている点である。キルケゴールはヘーゲル論理学の歴史への適用に反駁する形で、「可能性から現実性への移行」というアリストテレスの運動論の概念的枠組みを受け取り直してみずからの議論を展開する。その際、現実とならなかった「可能性」に特に注意を向ける。つまり「現実になったこと」は、つねに、その反対の「可能性」をともなって生起してくるということである。

「悔い」が問えるのは、まさにそのような「可能性」が存在していたからにほかならない。こうして、「あれかーこれか」とは、過去の選択における「可能性」に読者を目覚めさせ、そして読者がその固有の「現実性」の「責め」を負うことによって、「悔い」を現実化させるためのレトリックであることが明らかになる。

結論

本論の論述によって明らかにされたのは、キルケゴールの著述を介した言語活動は、「発見的認識」を形づくるという現代のレトリックをめぐる議論の文脈において十分に理解されるということである。キルケゴールは、その前期著述活動をとおして、読者に対して「キリスト者になる」とはどういうことなのかを問いただそうとした。それは、「キリスト者」として「自己」を錯覚していることを、読者に気づかせることであった。つまりキルケゴールは、読者の「自己」を問いただそうとしたのである。仮名という「可能性」の形式による著述活動は、この問い直しを読者において現実化させることを目的とするものであった。読者は、仮名著作を読むことによって、「自己」の「可能性」を呼び覚まされるのである。この場合「可能性」とは、現実となるべきであり、かつなりえたにもかかわらず、現実にならなかったものと解される。読者はこのようにして「自己」に向き直ることをへて、再度、「自己」を選ぶこと、つまり悔いることへといざなわれる。あるいは、少なくとも悔いることが、読者への倫理的な要請として示されるのである。キルケゴールのレトリックとは、「キリスト者」としての読者の「自己認識」を、仮名性という「可能性」の形式によって、読者において揺さぶり解体させようとする実験的な試みなのである。

(論文審査の結果の要旨)

キルケゴールは、20世紀のキリスト教神学あるいは宗教哲学に対して決定的な影響を与えた思想家であり、1950年代以降、実存主義の代表者として神学や哲学などの思想研究の領域で、さらにそれを超えて、広範な読者を獲得してきた。日本でも、この間多くの優れたキルケゴール研究がなされた。しかし、21世紀を迎え、キルケゴール研究は新たな世界的な進展を示しつつある。それは、少なからぬ欠陥を抱えていた従来のキルケゴール全集を乗り越える新たなデンマーク語キルケゴール原典全集が完成し、この批判的校訂版全集に基づいた研究成果がコペンハーゲン大学のキルケゴール研究センターなどを中心に精力的に公刊され始めたからである。この校訂版には、キルケゴール自身が刊行した著作以外の膨大な日記やノートなどが収録され、当時のデンマークの思想動向も視野に入れた緻密な研究が積み重ねられ、従来のキルケゴール像の大きな書き換えが進行中である。谷塚論文は、この世界的に進行中の新しい研究動向に呼応するものであって、キルケゴール思想をレトリックと倫理的なものとの相互に関連付けて解明しようとする点で、きわめて独創的かつ意欲的な研究である。本論文はキルケゴール研究に新しい重要な研究成果をもたらすものであるが、同時に、従来の研究に対しても十分な目配りがなされている。本論文は初期から前期の仮名著作群を主な考察対象としており、第I部では、キルケゴール思想の表現形式の言語的特徴がキルケゴールのレトリックとして論じられ、第II部では、この表現形式に即して具体化された倫理思想の解明が試みられる。各部はそれぞれが3つの章から構成され、論文全体としては、それらに序論と結論を加えた8つの章から成り立っている。以下、本論文の研究成果より、特筆すべき点について説明を行いたい。

まず本論文では、批判的校訂版に収録された日記や哲学ノートを詳細に検討することにより、キルケゴール思想の哲学的背景について多くの興味深い洞察が示された。キルケゴールは、詩作や運動概念に関してアリストテレスを、懐疑の問いに関してはデカルト、自由概念についてはライプニッツを参照し、そしてキリスト教批判についてはレッシングから重要な示唆を受けている。従来キルケゴールについては、ヘーゲル哲学との関わりが問題とされることが多かった。確かに、ヘーゲルとの関係は重要であるものの、キルケゴール思想をより精密に理解するには、西洋哲学全般にわたる思想的背景を視野に入れる必要があることが明らかになった。これは、本論文の評価すべき成果である。

次にキルケゴールのレトリックを論じた第I部であるが、とくに強調したいのは、キルケゴールの宗教思想にとってレトリックが決定的な役割を果たしていることが明確にされた点である。本論文では、キルケゴール思想の表現ないし伝達に関わる問題が現代思想のレトリック論を参照しつつ論じられるが、とくに注目されているのは、キルケゴールの著作群が仮名著作と実名著作に分けられること、すなわち著作の二重性である。仮名著作は、内面性としての倫理的現実(実存)を間接的

に伝達し、自分自身の「ありえた、もしくはあるべきだった」過去の選択可能性を問いただし、それによって、読者を「自己」との出会い（自己自身への向き直り）にもたらし、これは、知識の直接的伝達を行う学問とは対照的に、実存の可能性を提示する詩や文芸の特質であり、仮名著作は、キリスト教世界内でキリスト教徒であることの自明性に埋没していた読者を、真に「キリスト者となる」よう促すのである。こうして、仮名著作の詩的機能は「キリスト者になる」という課題の遂行において決定的な役割を果たしていることが明らかにされた。これは、美的段階を最下位に位置付ける従来の「実存の三段階説」を再検討する上で注目すべき指摘である。

第Ⅰ部におけるキルケゴールのレトリックについての考察に続いて、第Ⅱ部では、倫理的なものの内実を掘り下げることが試みられる。本論文では、そのために前期キルケゴールの代表的仮名著作である「『あれか-これか』の文学的構造」から議論が始められる（第5章）。『あれか-これか』は、第一部の青年Aの手記と第二部の判事ウィルヘルムの書簡から構成されているが、論者は、ウィルヘルムが「あれか-これか」を青年Aに対して訴える意図に着目し、その意図を、未来の可能性が失われ「必然性の絶望」に陥っているAに対して、「人生の見方、もしくは自己理解」を変えさせることであると分析する。その立論は説得的である。続く第6章、第7章では、「あれか-これか」で問われるのが過去の選択行為における別の選択可能性であり、読者は、選択に際して自分が自由であったこと、それゆえ選択された事柄の「責め」が自分にあることに、不安の中で気づかされる。責めは「悔い」として現実化され、この悔いこそが、前期キルケゴールにおける「倫理的なもの」の核心なのである。

本論文によって、キルケゴールのキリスト教批判は倫理的なものを喪失した近代のキリスト教に対して向けられていたことが示された。読者は、仮名著作の読解を通して倫理的なものを現実化し、真の自己に、また真のキリスト者になることを実際に試みるように、つまり実験するように求められているのである。

このように本論文はこれまでのキルケゴール研究を大きく前進させる優れた研究であるが、単純な誤記などの修正すべき点以外にも、さらに展開し掘り下げるべき論点が散見される。たとえば、序論における方法論や論文構成の説明において、また各章の論述に関して、より丁寧な説明を行うことが必要であり、議論が図式的になりすぎている点についても改善の余地がある。しかし、こうした問題点については論者自身よく自覚しており、今後の研鑽において克服することが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年2月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。